

動物ふれあい活動を用いた地域活性化の取組みと ESD

斉藤千映美*・伊藤勇馬**

Mobile Farm in a Local Market as a Tool to Revitalize the Local Community and ESD

Chiemi SAITO and Yuma ITOH

概要：“Shin-Tera Komichi Ichi” is a market held on the 28th of every month at Shintera Komichi Ryokudo, Wakabayashi, Sendai City. The market aims at activating the local community and to motivate a wider communication among residents. We have joined the market with a mobile farm, mainly of goats, since October, 2013. In the present paper, we summarize the activities and discuss their significance as a tool to revitalize local community in relation to ESD. Contributions of the farm activity on the market and its outcome for both local residents and students are discussed.

キーワード：ESD, domestic animals, mobile farm, local market, community

1. 背景

国連の推計によれば、21世紀末には世界の人口は108.5億人に到達し、地球の気温は現在より0.3～4.8℃上昇すると推測されている（IPCC第5次評価報告書）。地球環境の激変はこれまで人類が体験したことのない未曾有の領域であり、限られた資源をめぐる貧困・国境を越える対立を回避するために、持続可能な社会への急速なパラダイムシフトは今や絶対に必要な条件となっている。国連が提唱するESD (Education for Sustainable Development, 持続発展教育)は、大量消費社会から脱却し、次世代市民に地球資源を残すことを目的として、新しい持続可能な社会を担うことのできる人材育成を行う教育である。ESDは21世紀の教育においては最も重要な概念となるべきものであり、その場は学校だけにとどまらず、全ての人々が価値観、態度、知識を身につける必要があることは言うまでもない。2014年にはESDのグローバル・アクション・プログラムが発表され、地域コミュニティ教育の重要性が強調されている。このような動きを背景にしてみると、高齢化や地域社会の力の衰退が進む日本の地方都市において、教育活動を「まちづくり」の力に

変える活動はどのようにあるべきであろうか。



写真1. 新寺こみち市

「新寺こみち市」（写真1）は、仙台市若林区の「区民協働まちづくり事業」として、2013年から、仙台市若林区の「新寺小道緑道」で実施されるようになったいわゆる手作り市である。

「区民協働まちづくり事業」は若林区の市民と行政の協働でまちづくりを進める事業のスキームである。新寺こみち市は、同事業のメニューのうち「公園活性化事業」の一環として実行委員会形式で運営されている。目的は、東北の農家・漁家・手づくり作家などの個人事業を応援すること、また新寺小路緑道を舞台とすることで、歴史ある地域と市民との間に新しい関係

* 宮城教育大学環境教育実践研究センター, ** 宮城教育大学自然フィールドワーク研究会 YAMOI

を作りだし、新寺地区周辺の活性化に寄与することである。仙台の風土に根ざした商いを支援することで地区に新たな魅力を生み出し、新しい地域づくりを行おうとする姿は、まさしく ESD の理念に則した活動といつてよいであろう。「新寺こみち市」には、2014 年度、毎月、パンや野菜、お菓子、コーヒー、工芸品などを中心に、約 40 店舗が参加している。曜日に関係なく毎月 28 日午前 10 時～午後 3 時まで市が立ち、参加者は毎回、1000 名程度に及ぶ（西大立目、私信）。

筆者らは 2013 年、仙台市若林区および新寺こみち市実行委員会から、公園活性化事業の取り組みとして、「新寺こみち市」に、触れることのできる生き物を導入してどのような効果があるか検証したいという提案を受けた。これが発端となり、「宮城教育大学自然フィールドワーク研究会 YAMOI」が大学で飼育されているヤギの展示を活動の一環として行うことになった。2013 年度には 10 月以降合計 3 回、試験的にヤギふれあい活動を実施した結果、仙台市若林区から「予想を超える成果を挙げた」と評価を頂き、2014 年度にも継続して、ヤギの展示とふれあい活動を行うことになった。本稿では以下に、2013 年度から 2 年度にわたり、合計 10 回実施したふれあい活動（うち 9 回でヤギの展示とふれあいを実施）の結果を分析し、「新寺こみち市」でふれあい学習活動が果たした役割を明らかにする。

宮城教育大学のヤギは、教員養成教育の教材動物として、2010 年より飼育されている。「自然フィールドワーク研究会 YAMOI」は、日頃からヤギの飼育を担当し、また主に小学生を対象とする動物ふれあい学習のプログラム作成や実践を行っている（齊藤ほか、2014）。サークルに参加する学生の日頃の経験が、市民を対象に実施されるふれあい学習活動においてどのように生かされるか、学生によって活動にどのような意義があったかを合わせて検討する。

2. 方法

仙台市若林区は、古墳時代にはいくつもの古墳が築造され、時代を下ると奈良時代には国分寺・国分尼寺が建立され、古くから栄えてきた。藩政時代になると、若林区新寺界隈は仙台城から見て鬼門に位置してい

たため、多くの寺院が集まりここに寺町が形成された。「元寺小路」から多くの寺院が移転したことから「新寺小路」と命名された通りを中心に地域は発展し、現在も新寺地区は寺院を中心に、商業施設、住宅などが混在する場所として歴史の名残を町並みに留めている。この地区の「新寺小路緑道」（長さ約 650m）は、新寺五丁目公園を東端、新寺二丁目公園を西端として整備され、2012 年には市民の憩いの場として仙台市の「杜の都 緑の名所 100 選」に選ばれた。ヤギのふれあい活動の場は、この緑道の西端に位置する「新寺二丁目公園」のオープンスペースである。

ヤギふれあい活動とは、公園内にヤギを連れて行き、繋留して、来場者が動物に触れたり餌をあげたりできる機会を設けることである。大学からヤギを運搬し、1 回につきのべ 5 時間、数名のスタッフが 1 頭または 2 頭のヤギを繋留し、餌やり・ふれあいを支援した。

繋留した場所は、新寺二丁目公園内である。事前に公園を清掃してからヤギを導入し、また繋留後も必ず清掃を行った。餌として、紙コップにニンジン・キャベツ・アオキの葉などを切って入れ、実費で希望者に提供した。ヤギには必ず学生が 1 頭あたり 1 名以上つきそい、特に幼児が近づいた際には首輪をつかんで保定し、ヤギと参加者の安全を確保した。日頃から毎週ヤギの飼育に参加している学生をヤギのそばに配置することで、参加者からの質問に答えたり、ヤギの食欲を観察するなどして、管理を適切に行えるようにした。ふれあい実施時には、学生はできるだけ参加者と交流するように務めた。

ふれあいの前後には手洗いをするよう掲示と口頭で参加者に伝え、水道のそばには液体せっけんを、ヤギのそばには消毒液を置いた。また口蹄疫に関する注意情報やふれあいの際の安全確保に関わる掲示を毎回行った。ヤギは犬を怖がるため、散歩で来る犬を近づけないよう注意を払った。

活動中は全体を管理する責任者を 1 名配置し、写真撮影を行った。またこの責任者とは別に、参加者の人数を 1 名がカウントした。ヤギと触れ合う、ヤギの写真近くに来て撮影する、餌をやる、ヤギにつきそう学生に話しかける、のいずれかの行動をとった場合、「ふれあい参加者」とみなしてその数と性別・年齢層

を記録した。

年齢層は、対象の見かけから、「10歳以下（幼児）」「若年層（10代～20代）」「中年層（30代～50代）」「高齢層（60代以上）」の分け方をした。なお、区分を簡素化するため、新寺こみち市は平日の日中に実施されることが多いので、学齢期の児童生徒が来場することは基本的に少ないという前提で年齢区分を行っている。

筆者らの新寺こみち市への参加回数は、2013年の10月～12月、2014年の5月～11月の合計10回で、毎回10時～15時までの5時間、活動を実施した。ただし、2014年の7月は、新寺こみち市自体が「夜市」として午後17時～21時に開催されたため、ヤギふれあいではなく、「暗闇博物館」の企画を出展した。暗闇博物館は、正方形のテントを2つ並べて幕を張り、その内側に触れることのできる動物の標本（骨格や剥製、毛皮など）を展示し、来場者が懐中電灯を用いて観察する（学生は標本についての説明を行ったり、子どもを対象にクイズを出す）というしくみで行った。

また、2014年の9月には、休日ということもあり、ヤギだけではなく、ウコッケイの雛のふれあいを試験的に実施した。

参加者数のカウントは、初回の2013年10月は概算で実施したため、男女比や年齢構成までは記録しなかった。また2014年11月のこみち市では、学生の人数が足りなかったため、参加者数は午前中は記録できず、午後のみ記録が残っている。これら2回分のデータは参考データとして扱った。本稿では、これらの限られた資料をもとに分析を行った。

ふれあい活動には当日だけでなく事前・事後の準備が必要である。毎回10名以上の学生が作業を分担して実施していた。活動に必要な資材や経費は、「ヤギふれあい活動」に関しては上述の「公園活性化事業」から支出された。

なお本稿で用いる新寺こみち市全体の来場者数は、「新寺こみち市実行委員会」の調査により得られた数値を用いている（西大立目、私信）。

2014年度の活動終了後、参加した21名の学生（1年生9名、2年生8名、3年生4名）に対してアンケート調査を実施し、最も心に残ったエピソード、自分の感じたこと、今後活動を続けるべきかどうか意見を尋ねた。

3. 結果

(1) ふれあい活動参加者の内訳

同じ方法でカウントを行った7回のヤギふれあい活動の参加者数は、平均して61名/時間、1回平均では303名であった。最も参加者が多かったのは2014年9月28日（日曜日、晴天）で、毎時124名（1回で合計620名）がヤギふれあいに参加した。なお、この日の「こみち市」来場者数は2000名であり、昼間開催された9回のうちでは来場者も最も多かった。一方、最もふれあい参加者が少なかったのは、2013年12月28日（平日、曇り時々雪）で、毎時平均42名（5時間合計で206名）（こみち市来場者は600名）であった。ふれあい活動参加者の人数と、こみち市への来場者数の推移を図1に示す。

時間あたりのふれあい参加者数、新寺こみち市への来場者数はともに、回毎のばらつきが大きい。夜市として行われた7月の新寺こみち市の来場者数は過去最多であった。これを除くと、快晴の日曜日であった2014年9月には極めて人が多く、悪天候の平日に特に人出が減っていた。すなわち、来場者数は天気と曜日に大きく影響を受ける。

ふれあい参加者数は、来場者と似た増減のパターンを示していた。ただし、増減の振幅は来場者数ほど大きくはなかった。

次に、全来場者あたりのふれあい参加者人数を「参加率」としてその推移を見ると、平均参加率は0.28で、夜間開催だった2014年7月を除けば、回による大きなばらつきは見られない（図2）。回数を重ねるごとにやや増加していくような傾向も見られるが、明白であるとはいえない。

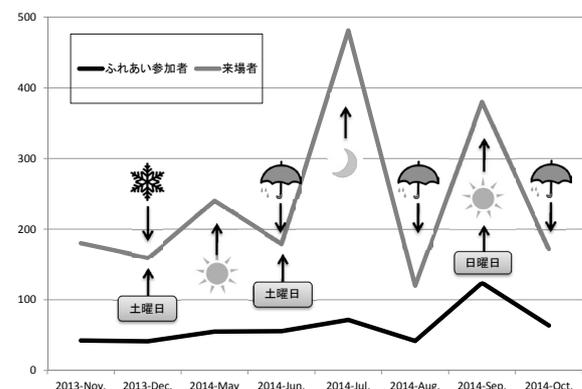


図1. 来場者と参加者の変動

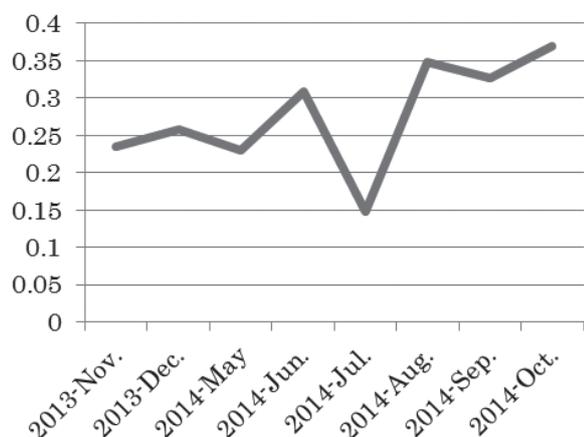


図2. 参加率(参加人数/来場者数)

参加者の性別は、記録を行った9回ともすべて女性の数が男性を上回り、平均すると女性が参加者全体の62%を占めていた。年齢構成を見ると、親世代に当たる30代～50代の参加者が全体の32%と多く、もっとも少ないのは高齢者層であった。ただし、夜間に開催された2014年7月の「新寺こみち市」では、最も多いのは若年層、少ないのは幼児層という特異的な年齢構成が見られた。

(2) 参加者の行動

午前中は、複数箇所の保育所から、散歩でヤギに会いに来る子どもたちが多く、その数も次第に増えて、2014年度の後半になると、午前中、子どもたちがひっきりなしにヤギを取り囲むこともあった。餌を購入することはできないので、チモシー（通常の主食としてある牧草）などを、状況に応じて子どもたちがあげられるようにした（写真2）。



写真2. ふれあい参加者(保育所)

一般の子ども連れの参加者は、子どもに話しかけ、励ましたり促したりしながら、子どものペースでヤギに

近づいてきた。子どもが餌をあげるところを写真にとった後で、初めて自分自身もふれあいに参加するという親が多かった（写真3）。



写真3. ふれあい参加者(幼児と保護者)

10～20代の参加者は、同伴者と会話しながら、写真を撮ることをきっかけに少しずつ近づいてくることが多かった（写真4）。



写真4. ふれあい参加者(若年層)

成人の方（多くは女性）になると、一人で行動されている方であっても、同伴者がいる方であっても、ヤギを見つけると戸惑いなくすぐに展示スペースに入ってきた（写真5）。また、発話が多く、ヤギをはさんで同伴者や周りにいる人（他の参加者や、出展側の学生）との会話が盛り上がった。

とくに高齢の方の中には「昔、家でヤギを飼っていて・・・」「学校帰りに近所のヤギが・・・」というお話をされる方が非常に多く、ヤギは「懐かしい」気持ちを誘うもののようなようであった。

参加者の方たちからは、ヤギそのものについての質問、ヤギはどこに住んでいるのか、なぜここにいるの



写真5. ふれあい参加者(成人)

か、などの質問が多く寄せられた。

(3) ふれあい学習における学生の役割

ふれあい学習において、学生はたいへん重要な役割を果たしている。それは、たんに参加者の安全や衛生の確保ではない。その場にいるヤギは、参加者にとっては「一頭のヤギ」であるが、学生がそこに介在することにより、それは「ヤギ」ではなく「ともちゃん」に変わるのである。ともちゃんが2歳であること、赤ちゃんのときにはお母さんの乳の出が悪くて人工哺乳も受けたこと、そのためとても人になついていること、ニコちゃんのおかあさんで、初めてのお産なのに立派にお母さんを務めていること、優しい性格であること、夕方になるとそっと人によりそい、撫でられると嬉しそうにすること・・・などが、学生がいることで参加者に伝わり、それはもう、ただのヤギではなくなるのである。そのようにして、一頭のヤギが「かけがえのない」いのちであり存在であることを感じてもらえることが、ふれあいの最も大切な意義なのである。また、成人の参加者の方々が多く疑問に思われるのは肉垂の意味や寿命、食べ物、普段の暮らしぶり、なぜ大学でヤギを飼うのか、といったことだが、それらをヤギに代わって答えられるのも、普段から世話をしている学生だからである。幼児に対して、例えば「葉っぱを食べるとパリパリ音がする」などの独特の発見の言葉を拾い上げたときに、「みんながごはんを食べるときはどんな音かな」などと問いかければ、さらに幼児は表現をふくらませようと思いを巡らせ、ヤギと自分を比較することに思い至る。こうした支援も介助をする大人の役割（並木、2008）である。

特にヤギを怖がる子どもたちに対しては、ヤギの目線に立って、「そっと近づいてくださいね。優しい声で話しかけてあげてね」などと声をかける。「ここを触ると、びっくりします。こちらから、なでてみましょう」などのように、ヤギの気持ちにたってふれあうことを支援するのも、学生の役割である。

このように、ふれあいを介助する学生は、技能と知識に基づいて多様な役割を果たし、ヤギの「代理人」として、参加者の動物との出会いに大きな「意味」をもたらす存在なのである。根岸ら（2014）はふれあい施設における入場者の行動の分類を行っているが、入場者の行動が「餌をやる」「触れる」「追いかける」などのパターンに分類され、動物をめぐる会話を通じて思考が深まる様子は十分に見て取れない。これは、施設において、動物と入場者の間を介在する役割を果たすが少ないことに起因しているようにみえる。

学生には、自分たちにしか果たすことのできない役割がある。そのことに誇りを持ちながらも、逆に責任があることを理解する必要がある。「新寺こみち市」では、2年生以上の学生は、長い期間ヤギの飼育や教育実践に携わっているためヤギの取り扱いや触れ合いには慣れた様子であり、参加者からは「学生が素晴らしい」という評価を頂くことも少なくない。視線をヤギに近づけて低い姿勢でヤギの取り扱いをしている学生（写真6）は、特に好感を与えている印象である。1年生の学生は、最初の回は寒いとポケットに手をつこんだままお客さんと話をする、お客さんが来てもぼうっと見ている、などのことがあるが、回を重ねると確実に役割を理解するようになり、総体としては、天候に関わらず、協力し合いながら笑顔でふれあいを支援することができるようになった。このような



写真6. ふれあい支援時の学生の姿勢

学生の変化もまた、学びの成果の一つの形であると捉えたい。

(4) 参加者からの感想

筆者らが自分たちで聞き取ったもののほか、ふれあいを支援した学生へのアンケートで、印象に残った参加者の話をあげてもらったところ、次のような例があった。ほとんどすべて、中年層～高齢者層から聞き取った話である。

①ヤギの思い出

- ・ 子どものとき、とても可愛がっていたヤギが、ある日食卓に出てきた。今考えると、食べるのもたいへんな頃だったのだと思う。悲しくて、泣いて泣いて食べることができなかった。(女性)
- ・ 昔、祖母の家(山形)へ行った時、ヤギを飼っており、祖母が「体に良いから」といってヤギの乳を飲ませてくれた。味が濃かったような記憶があるが、どのような味であったか、飲む機会があればまた試してみたい。(高齢, 不明)
- ・ 子どもの頃、通学路の川原にいつもヤギがいたものだ。橋の上から草を食べているのを見下ろしていたことを覚えている。(高齢, 男性)
- ・ 家でヤギを飼っていた。大変な生活で、母親の乳が出なかったため、ヤギの乳で育てられた。(男性)
- ・ (一緒に来ていた孫娘と思われる人に向かって) 昔はヤギはいろんなところで見られた。体の弱い人がお嫁に行くときはヤギと一緒に嫁入りしたものだ。(高齢, 女性)

中年層、高齢者の話の中に多く出てくるのは、「子どものころのヤギの思い出」である。自分の家でヤギを飼っていた。世話をした。ヤギの乳を飲んだ。などという記憶のある高齢者の話は、毎回必ず記録され、内容の多様性から、東北地方に限らずさまざまな地域で多くの方がヤギに関連した記憶を持っていることが伺えた。非常に懐かしい様子で、自然な笑顔を浮かべられ、ヤギに触れられた。話の中には、「引っ張るのが重かった」「温かい乳を飲んだ」「川原に真っ白のヤギがいて」など、身体的な感覚の回想が含まれることが多かった。

②ヤギへの愛着

- ・ 生き物が大好き。毎回ヤギに会いに来ている。いつか、絵本に描きたいなと思っている(女性)
- ・ ヤギが好きで、近隣の県にヤギのいる牧場があると聞くと必ず見に行っている。ここには毎回、ヤギに会いに来ている(女性)

動物が好き、ヤギが好きだというお話をなさる方々は年齢を問わず存在し、これらの方々は毎回来てくれるようになった。中には学生にお菓子を差し入れをしてくださる方、終了間際の15時ぎりぎりに「間に合ったわ!」と言いながら走っておいでになる方もいた。保育所の子どもたちも多数来てくれるようになり、ヤギが出展されていない12月以降は、来場したのにヤギがいなかったと失望させてしまうことがあった。多くの方が動物に好意を持ち、ふれあいの際には様々な質問をされたり、「面白い」「かわいい」と口にされていた。

③活動への共感

- ・ ここは町中なので、日常生活の中で子どもが生き物に触れる機会がない。子どもにとっては本当に良い体験である(幼児を連れた女性)
- ・ ふれあい活動は素晴らしい。生き物には人を元気にする力がある。特に学生がそのような活動をしているということには、意義がある。(高齢者, 女性)

生き物がいることで子どもを始め人の心が和む、楽しい体験ができる、という活動に共感するコメントは、親世代以上の参加者からしばしば聞かれた。

(5) 学生の感想

学生に「感じたこと」「学んだこと」を選択式で尋ねたところ、もっとも多かった感想は、「また活動に参加してみたい」(全体の81%)であった。「動物の持つ魅力を感じた」(57%)、「子どもとの触れ合いが楽しかった」(65%)、「様々な年代の方との触れ合いが楽しかった」(65%)などの回答が多く挙げられた。

コメントにも「いろいろな方と交流し、普段は何うことのできないような昔の話などが聞けた」のように多様な年代の人との交流にやりがいを感じている表現

が多く見受けられた。「どのような世代の方であっても、動物と触れ合うことを喜び、笑顔になるということを知った」といった意見に代表されるように、生き物が人を惹きつける力を知った学生もいた。

活動を次年度以降も続けるべきか尋ねると、95%の学生が「続けたほうがよい」と答えた。ただし、「自分たちで経費をまかなってボランティアでも実施すべきか」という質問に対しては、1年生が100%「はい(ボランティアでも続けたい)」と答えたのに対して、2年生は38%、3年生は100%が「いいえ(経費を自分たちで出して続けることは難しい)」と答えた。

1年生からは「お客さんと会話する中で、ユキちゃん・トモちゃんの子どもに来春会えるのを楽しみにしているとの声を聞いた。ヤギの名前を覚えてくださっている方もいて、需要があることを感じるのので、ぜひ継続したい」「小さい子やその親御さん、年配の方々などが、ヤギを見て触って楽しんだり、話をはずませてもらって嬉しいので、その空間を無くしたくないな、と思います」などの素直な思いが多く挙げられた。一方、2年生以上の学生からは、「やりがいがあり、個人的にはボランティアでも行きたいです。ただ、人手が足りないことが時にあるので、経費が出ないとなると一人ひとりの負担がより大きくなり、行きたくない人が増えていくかもしれません」という意見に代表されるように、「個人としてはやる気があるが、集団全体としては作業量が多いため、自分たちで経費をまかなって出展するのは難しい」という意見が圧倒的であった。

4. 考察

(1) 「新寺こみち市」への来場者とヤギの貢献

「新寺こみち市」への来場者数は変動が著しく、天気の良い日・休日には多くなるが、天候が悪いときは少ない。また、夜間に開催された日は昼間よりも来場者が多かった。しかし、ふれあい参加者の内訳を見る限りでは、昼と夜では明らかに年齢層に差があり、一概に両者の良し悪しなどを比較することは難しい。年に1度程度の夜間開催は、昼間だと参加することの難しい年齢層の人の参加を促すのに適した方法だといってよいであろう。なお、具体的なデータはないものの、来場者数は圧倒的に午前中に多く、昼過ぎから来場さ

れる方は午前中の多く見積もっても半分以下である。またその一方で、来場された方のうちふれあいに参加される方の割合は、天候や曜日に左右されないことも明らかになった。来場者のうち、約3割程度がふれあいに参加されるという結果からは、ヤギふれあい活動は一定程度認知され、少なからぬ来場者に親しまれていたことがわかる。

ふれあい活動の出展が「新寺こみち市」にどの程度のにぎわいをもたらしているか、客観的に評価することは難しいが、私たちは、一定程度、活動には市民を公園に集める力が働いていると考えている。その理由として、まず、回数を重ねるにつれ、いわゆるリピーターが多いと感じる学生が増えたことがあげられる。ヤギの名前を覚えてくれたり、他の参加者にこのふれあい活動の意義について説明してくれるような参加者も次第に多く見られるようになった。それらの参加者が「ヤギに会いに(こみち市に)来ました」と話した、という記録も、特に後半は毎回報告されている。また午前中は、天気が悪くない限り、近隣の数か所の保育所の園児が集団でヤギに会いに来るようになった。職場の昼休み時になると、公園の外を手ぶらで歩く人が、ヤギを見かけて中に入ってくることも少なくない。これらの人々は、「こみち市」がただものを売るだけの場であれば来場することがなかった来場者層である。

ふれあい活動では小さな子供を連れた保護者も多くみられる。保護者にとっては売っているものを見たり、出展者と会話をするだけでも楽しい市だが、買い物のできない小さな子どもにとっては、必ずしもそうであるとは限らない。ふれあい活動ができることは、子どもを連れた大人にとって「新寺こみち市」の魅力の一つであると考えられる。多様な方を公園に呼ぶ手段としての機能は果たされていたのではないだろうか。

なお私たちは、本稿の執筆にあたり、「新寺こみち市実行委員会」へのヒアリングを実施し、ふれあい活動出展の成果についてのお考えを尋ねたところ、次のようなご意見をいただいた。

“公園のような不特定多数の人が訪れる空間で実施することに、大きな意味があると考えています。ヤギを媒介にして、知らない人同士が何気ない会話をかわしたり、ヤギと人のふれあいをながめ、そこに自分も

加わったりすることがなされていくからです。都市の中で、いまは他人同士が話をすることはほとんどありませんが、こうしたかわりが都市型コミュニティの最初の一步になり得るのではないかと思います。”

実行委員会の積極的な姿勢はふれあい活動実施の上でも非常に大きな支援であった。適切なサポートや宣伝をして頂いたことで、地域の方々に来ていただけるようになり、また出店者の方々の中にもヤギや学生に会いに来てくださる方が多くなった。

多くの方がふれあいに参加してくださる一方で、ヤギのストレスにも配慮する必要がある（酒井ら、2012）。動物が安心して過ごせるような穏やかで落ち着いた環境を維持することもふれあい活動では重要であり、その意味では、参加者がこれ以上多くなる場合には、別の活動を導入する必要がある。実際、もっとも参加者の多かった2014年9月には、予め来場者が多いことが予想されていたため、ヤギふれあいのほかにウコッケイの展示を行った。参加者が多くなることを想定して、その対応を決めておくことも今後は重要になるであろう。

(2) 参加者への貢献

参加者からよせられるコメントは好意的であり、何よりヤギを囲んで自然に笑顔を見せてくれる方が多かった。長時間滞在し、同伴者や学生、時には居合わせた他の参加者と長時間話し込む方々も多く見られた。

動物とのふれあいを体験する幼児は楽しそうで、発見したことや疑問に思ったことを多様な表現で学生に示した。高齢の方々は、ヤギを見ると幼いころを思い出し、それをきっかけとして子ども時代の地域の暮らしについて、周囲の方々に語ってくださることが多かった。

ヤギの体、性格、行動について興味関心を持って質問してくる人は多く、知っているようでいながら実際には馴染みのない生き物を間近に見ることで、好奇心を掻き立てられるようであった。また、ヤギを囲んで人の輪ができることが多く、これによって、市には商いの場としての役割のみではなく、人の交流の場であるという共通認識が生まれたように思われる。ヤギがそこにいることによって、人の間に会話が生まれ、昔の農村の暮らしに思いをはせる機会を持った方も少

なくはないであろう。

私達は、地域社会の再生に向けて、かつての宮城の暮らしのありかたから「持続可能」の意味を考え、学ぶ過程が必要だと考えている。動物のいた農村の暮らしを聞き取り、なつかしい里山の暮らしへの関心を高めることのできるよう、今後の活動を位置づけていきたいと考えている。

(3) 「新寺こみち市」と学生

私たちは、この活動は学生にとって得るものの大きな体験だと考えている。学びの一つは、普段から飼育している動物を用いたふれあい活動の技術を実践で試すことである。それによって、動物の適切な取り扱い、正確な知識の伝達、参加者の安全や衛生の確保、身だしなみやふるまい、年代によって言葉遣いを変えながら会話すること、などを否応なしに学ぶからである。特に、中年層～高齢層の方々や幼児とふだん接することのない学生たちにとって、「新寺こみち市」は貴重な社会との出会いである。実際、そうした出会いが学生にとって新鮮であったことは、学生たちのコメントから裏付けられたと考えている。またそうした人との出会いのみならず、都市空間の可能性や課題、現代の子どもたちと社会の関わり、町中の自然や環境などについて、通常のキャンパスでの生活から離れて考える機会を、学生はここで与えられている。

2つ目の学びは、活動の企画運営を学生自身が実行していることである。毎回するべきことは多く、若林区および実行委員会との連絡調整、企画書作成、学生シフトの作成と事前の話し合い、準備（餌にしている植物の採集など）、前日の物品点検、当日のヤギ運搬、参加学生からのレポート回収、報告書作成、会計など、規模は小さくてもプロジェクトとしてやるべきことはひと通り含まれている。これら、企画運営の作業を受け持ったのは2年生以上の学生である。責任をもって活動を運営するためには、安易な気持ちだけでは十分ではないし、多くの人が協力しあわねばならない。そうした認識を彼らが得ていることは、アンケートの結果から如実に伺うことができる。

しかし、教壇に立つことを夢見る学生たちにとって、社会と出会いを経験することは、得難い機会であり必ず身につく体験である。行政、地域住民、出店者、

老若男女、さまざまな人々の行き交う公園で何かを起こす活動は、おそらくほとんどの学生にとって、人生において最初で最後のものであろう。「新寺」をめぐる一つの目的のために多くの人々が智慧を凝らし動く社会の輪の中に、学生たちは運営スタッフとして参加し、結果としては彼ら自身が市のにぎわいの一部となる。その体験のすべてを通じて、生き物・自然・公園・地域社会・行政の支援・子どもの環境など、さまざまな社会の現状を感じる機会を与えられる。自ら体験していない地域の活性化を語る教師にどれだけの説得力があるだろうか。体験したことを糧として、地域を動かす能力は成長する。本事業を通じて、筆者自身だけではなく、実行委員会の方、またふれあいに参加された多くの地域の方が、共通する思いを学生や子どもたちに対して抱いていることを言葉の端々に感じた。大規模な市への発展はありえないからこそ、小さな市は市民の出会いの場、学び合いの場として機能する可能性を持っているように思われるのである。

謝辞

本実践にあたっては、仙台市の阿部和則氏、木村政志氏、木村浩基氏の多大なご支援を頂いた。こみち市実行委員会の西大立目祥子氏、佐藤正記氏には常日頃の活動の実践への協力や学生への助言、さまざまな意見交換に至るまで、あらゆる場面でご支援を頂き、本稿の執筆にあたりご意見を頂いた。大学のヤギ飼育

活動に関しては、宮城教育大学の見上一幸学長はじめスタッフの皆様にご理解とご協力を頂いた。佐々木久美氏および宮城教育大学自然フィールドワーク研究会 YAMOI からはアンケート実施にあたり協力を頂いた。今井明夫氏からは活動についての深いメッセージとご助言を頂いた。

以上の方々および、こみち市への出展にあたりお世話になった関係者の方々に深く感謝する。

本活動（ヤギふれあい活動）は、仙台市若林区公園課による平成 25～26 年度「公園活性化事業」の一環として宮城教育大学自然フィールドワーク研究会 YAMOI により実施された。

引用文献

- 斉藤千映美・渡辺孝男・一條那津美 2014. 大学における動物の飼育と学習プログラムの開発. 宮城教育大学環境教育紀要, 16, 75-84.
- 酒井秀嗣・佐藤恵・若林修一 2012. ふれあい動物園における展示動物のストレスに関する一考察. にほん大学歯学部紀要, 40, 57-61.
- 並木美砂子 2008. 子どもが動物に出会うとき. 風間書房, 東京.
- 根岸奈央・千田絵里子・安藤元一・小川博 2014. 子供動物園のふれあい施設における入場者の行動. J. Agric. Sci., Tokyo Univ. Agric., 59, 157-162.

